

## 第一節 序言について

この著述『反キリスト者』はごく少数者のものであり、そのうちの誰一人もまだ生まれていないかもしれない。そして、この僅かな人たちが『ツァラトウストラ』を理解してくれるであろう。彼を理解してくれる人のなかには彼の死後生まれる人たちもいる。それゆえ、「明後日」こそが、ニーチェの時代である。<sup>i</sup>

ところで、ニーチェを理解する条件は、①「誠実であること(rechtschaffen sein)」、②「修練していること(geübt sein)」、③「無関心となっていること(gleichgültig geworden sein)」である。すなわち、①「精神的な事」に関して「誠実であること」であり、それはニーチェの「真剣さ」や「情熱」を「耐え抜く」ためである。それから、②「山頂で生きること」を「修練していること」、すなわち、「政治」や「民族的自己欲」の「哀れな当今のお喋り」を見下ろす「修練をしていること」である。そして、③「無関心となっていること」であり、「真理が役に立つかどうか、真理は自分の災厄であるかどうかを問うてはならないこと」である。以上のような条件を満たすならば、「強さ」、「勇気」、「宿命」、「新しい耳」、「新しい眼」、「新しい良心」、「意志」、「畏敬」、「自由」をもちうる者となり、ニーチェの「読者」となりうるのである。<sup>ii</sup>

## 第二節 反キリスト者

### (1) 極北の民（「反キリスト者」の1）

われわれは「極北の民(Hyperboreer)」である。ピンダロス(Pindaros;BC.518-438)は「陸路によっても海路によっても汝は極北の民への道を見出さないであろう」と言っている。

「北の、氷の、死の彼岸」にわれわれの「生」、われわれの「幸福」がある。われわれは「幸福」を発見した。われわれは「道」を知っている。われわれは何千年もの「迷路(Labyrinth)」からの「出口」を見つけ出したのである。<sup>iii</sup>

「近代人」は途方に暮れ、出口も入口も分からない。彼らは「近代性」という病に罹っている。すなわち、「怪しげな平和」、「臆病な妥協」、「近代的な然りと否の有徳的不潔さ」という病に罹っているのである。「近代人」はすべてを「理解する」がゆえに、すべてを「許容する」。この「寛容」はわれわれにとって「熱風(Scirocco)」である。このような「寛容」や「熱風」のもとに生きるよりむしろ「氷」のなかで生きよう。われわれは充分「勇敢」であったが、この「勇敢さ」をもってどこへ向かうべきかを知らなかったのである。われわれは「陰鬱」になり、人々はわれわれを「運命論者」と呼んだ。しかし、われわれの「運命」とは「諸力の充溢、緊張、鬱積」であった。われわれは「稲妻と行為」を渴望する。われわれは「弱者の幸福」、「恭順」からもっとも遠いところにいたのである。<sup>iv</sup>

### (2) 力への意志（「反キリスト者」の2）

ここでは「力」からすべてが解釈される。すなわち、①「善」とは「力の感情」、「力への意志」、「人間のうちなる力そのもの」を高める一切のものである。これに対して、②「悪」

とは「弱さ」から由来する一切のものである。そして、③「幸福」とは「力」が生長するという「感情」、「抵抗」が克服される「感情」である。ここから考えると「満足」ではなく、より多くの「力」が、「平和」ではなく、「闘い」が、「徳」ではなく、ルネッサンス式「有能」、すなわち「偽善から自由な徳」が求められる。したがって、「弱者」と「出来損ない」は「没落」すべきであり、われわれはそのために助力すべきである。およそ「背徳」より有害なものは、すべての「出来損ない」や「弱者」への「同情行為」であり、それがキリスト教である。<sup>v</sup>

### (3) より高い価値の人間（「反キリスト者」の3）

ここで提出する問題は、「より高い価値の、生きるにより値する、未来のより確実な者」として「いかなる型の人間を育成すべきか、意欲すべきか」という問題である。この型の人間はこれまでも現れてきたが、それは「僥倖」として、「例外」としてであって、決して「意欲されたもの」としてではなかった。この型の人間はむしろまさにもっとも「恐れられて」きた人間であり、これまではほとんど「恐るべきもの」であった。この「恐れ」から「逆の型」が「意欲され、育成され、達成されて」きた。それは「家畜」、「群れをなす動物」、「病気の動物」である人間であり、「キリスト者」である。<sup>vi</sup>

---

<sup>i</sup> KSA 6, Der Antichrist. Fluch auf das Christentum, Vorwort, S.16

<sup>ii</sup> Ibid.

<sup>iii</sup> Ibid., 1, S.169

<sup>iv</sup> Ibid.

<sup>v</sup> Ibid., 2, S.170

<sup>vi</sup> Ibid., 3, S.170